

介護ビジョン 8



第2特集 入居者のQOLを改善
成功する排泄ケア

第1特集 キーワードは「活動」と「参加」



リハビリ 大変革時代に 立ち向かえ!



リハ職に求められる新たな役割

—— 結城康博 (淑徳大学総合福祉学部社会福祉学科教授)

- 【老健】**
 社会福祉法人康和会 介護老人保健施設ろうけん くがやま
 医療法人森田記念会 介護老人保健施設プロスペクトガーデンひたちなか
 医療法人社協友会 介護老人保健施設リハビリケア かつしか
- 【通所リハ/訪問リハ】**
 医療法人社団永生会
 医療法人社団輝生会 在宅総合ケアセンター元浅草/株式会社ガイア
- 【通所介護】**
 リハビリ推進センター株式会社 リハビリテーションデイスクール和
 はっぴ〜ライフ株式会社 はっぴ〜ライフ吉祥寺事業所
 リハビリ企画合同会社 リは職人てい

介護保険制度の目的を理解しないと生き残れない

—— 小室貴之 (在宅療養支援 楓の風グループCEO)

—— 渡邊明子 (在宅療養支援 楓の風グループ通所介護事業部長)

「自分で行う」ことこそが「活動」「参加」につながる

—— 藤原 茂 (夢のみずうみ村代表)



[事例1] 介護老人保健施設

在宅復帰と在宅支援に向け、リハビリの質と量を追求「活動」と「参加」につなげる

社会福祉法人康和会 介護老人保健施設ろうけん くがやま
医療法人森田記念会 介護老人保健施設プロスペクトガーデンひたちなか
医療法人社団協友会 介護老人保健施設リハビリケア かつしか

今年度の介護報酬改定では、病院から在宅への橋渡し役としてのリハビリの推進や「活動」と「参加」を目的としたリハビリのあり方が問われている。そこで、リハビリの充実度で注目される介護老人保健施設「ろうけん くがやま」(東京都世田谷区)、「プロスペクトガーデンひたちなか」(茨城県ひたちなか市)、「リハビリケア かつしか」(東京都葛飾区)取材した。これらの施設では、リハビリの量と質を追求し、利用者の在宅復帰を支援。「活動」と「参加」へ結びつくリハビリをめざしている。(取材・文/山辺健史)

リハビリ人員を増加し 在宅復帰を強化

在宅復帰を優先課題とすることでリハビリを充実させた介護老人保健施設がある。東京都世田谷区にある社会福祉法人康和会介護老人保健施設「ろうけん くがやま」(以下、くがやま)がそのひとつだ。くがやまは2002年開設。入所定員60人、通所リハビリ35人のリハビリを、理学療法士(P.T)4人、作業療法士(O.T)4人、言語聴覚士(S.T)2人という手厚い体制で行っている。

「地域包括ケアシステムを念頭に老健の役割を考えたときに、在宅復帰が最重要課題なんです。そのため当施設では、在宅復帰のためのリハビリ強化を数年前から意識的に実行してきました」と和田拓也事務課長は振り返る。その言葉の通り、くがやまでは2012年から専門職を約2倍に増員。同年4月から入所者の在宅復帰率を50%に引き上げた。以後、在宅強化型施設としての運営を維持している。

くがやまでは現在、利用者の入所後3カ月間は1日20分程度、最



社会福祉法人康和会介護老人保健施設ろうけんくがやまの和田拓也事務課長

大週6回のリハビリを実現できる体制を構築している。リハビリに積極的な姿勢を専門職が徹底し、利用者にも3カ

月という期間を区切って目的意識を共有することで、「短期集中リハビリ」体制を可能にしているのだ。また、認知症の利用者へも3カ月間、1日20分程度週3回の「認知症短期集中リハビリ」も実施。身体機能回復に加えて認知症状態をよく見極め、認知面のリハビリにも取り組んでいる。経営面においても、在



社会福祉法人康和会介護老人保健施設ろうけんくがやまは、最大週6回のリハビリを実現できる体制を構築

宅強化型加算(年間1000万円超の増収)に加え、短期集中リハビリ・認知症短期集中リハビリ加算を取得することで、安定を保っているといえよう。

活気を生むリハビリの導入で 在宅復帰率を上げる

楽しめるリハビリを導入するこ

とで利用者の意欲を促し、在宅復帰につなげている施設もある。茨城県ひたちなか市の医療法人森田記念会が運営する介護老人保健施設プロスペクトガーデンひたちなか(以下、ひたちなか)は03年開設。入所定員100人(ショートステイ5人)、通所リハビリ100人をPT9人、OT4人、ST4人で担当している。

ひたちなかでは08年、ケアマネジャーの資格をもつ須田祥子副施設長が就任し、集団レクリエーション中心だったリハビリ内容を改革。専門職を徐々に増やし、スポーツジムと同じ機器を揃えることで、楽しみながらリハビリができる環境を整えた。

「やる意欲をかき立てるようなりハビリメニューにするため、問題が解けることで達成感のあるくもん学習療法も取り入れました。また、11年からは足腰に装着する歩行練習のための介護ロボットHALを



須田祥子副施設長(医療法人森田記念会介護老人保健施設プロスペクトガーデンひたちなか)



全国の老健で唯一HALを3台所有する、医療法人森田記念会介護老人保健施設プロスペクトガーデンひたちなか

導入。「歩けたー」とリハビリ室から歓声が上がるとなり、フロアに活気が生まれました」と須田副施設長は効果を強調する。

ひたちなかは全国の老健で唯一HALを3台所有。それらを運用することで、スタッフの技術や知識、チームワークの向上にも役立つという。その他にも、利用者が切り絵や縫い物に挑戦するアートセラピーなど、バランスの良いリハビリを提供。こうした多くのリハビリの相乗効果で、14年から在宅復帰率50%以上を達成し、現在は在宅復帰率60%以上を

誇っている。

自宅訪問や家族との連携で 在宅生活をサポート

老健でのリハビリには、退所後の在宅生活を見越したフォローも大切ようだ。

東京都葛飾区に2012年に開設された上尾中央医療グループの医療法人社団協友会介護老人保健施設リハビリケアかつしか(以下、かつしか)は、「在宅復帰したから終わりにしない」を信条に在宅に移行した後も継続した支援をめざしている。

「入所して3カ月間は毎日リハビリを実施できますが、それを超えると老健ではリハビリが週2回になってしまふので、なるべくそこで退所していただきます。その代わりすぐ通所リハ・訪問リハの利用に切り替えることで、リハビリ回数を減らさず継続的にかかわっていく方針を立てています」と飯塚佳規リハビリテーション科係長は説明する。

また、かつしかでは、利用者の入所前と退所前に専門職が自宅訪問する「入所(退所)前指導」も行っている。入所前の訪問では、室内の動線や段差などを確認しリハビリに活かすとともに、退所前の訪問では福祉用具の設置や自宅改修のアドバイスも実施。退所前の訪問には利用者本人にも同行を願っている。「実際に暮らした場合、どのようなことに困るかを一緒に確認することで、安心して自宅に戻ってもらう」飯塚係長ことを徹底している。そうしたきめ細かいサポートでかつしかは、開設3年で在宅復帰率30%を達成した。

一方でそれぞれの施設では、利用者や在宅で受け入れる家族との連携も重視しているようだ。

特集 キーワードは「活動」と「参加」
リハビリ大変革時代に立ち向かえ!



飯塚佳規リハビリテーション科係長(医療法人社団協友会介護老人保健施設リハビリケアかつしか)

3つの施設では、在宅への移行が決まった利用者の家族向けに、オムツ交換や移乗の方法などを詳しく伝える「ファミリー指導」などを行い、在宅生活の不安を取り除いている。さらに、3施設の通所リハ事業では、必要な利用者には、リハビリ職や医師、看護師、ケアマネジャーなど多職種が集まる「リハビリ会議」を実施している(「リハビリテーションマネジメント加算II」を取得)。リハビリ会議に家族も参加してもらうことで、症状や身体機能の回復度合いなどを説明し、円滑なサポートにつなげている。

生活リハビリやフロアリハビリを実施

老健では、専門職が行うリハビリだけでなく、介護職と連携し、生活の中で行える生活リハビリを取り入れている施設もある。かつしかでは、まず入所初日に利用者

面もあるようだ。

かつしかでも以前から「活動と参加」に対する、ICF(国際生活機能分類)モデル研修会が定期的に開催され、リハビリ職の教育に力を入れてきた素地がある。この研修会では、事例での利用者の行動を「心身機能」や「活動」「参加」などのICFモデルに当てはめて分析。活動と参加に効果的な取り組みなど、ディスカッションを重ねている。

「活動と参加を利用者に促すためには、まずはリハ職からの提案が大事だと思っています。『近所のスーパーに買い物に行きたい』という利用者の希望を聞き出したら、訪問リハの使用などを提案し、自宅からスーパーまで実際に一緒に行くことで移動での自信をつけ

てもらおう。そうすればその先も活動的になってくれることが多いです」と飯塚係長は語る。さらにかつしかでは「リハ職が地域に行くことも大事」との認識から、地域ケア会議をはじめ、地域で行われる認知症カンファレンスや介護予防プログラムにも職員を積極的に送り出している。

ひたちなかもまた、活動と参加

の身体能力を測定。そのうえで、①利用者が自分でできることは何か、②介助が必要ならば、どう介助すれば良いのか——を指導している。そうすることで、利用者が自分でなるべく身体を動かす「生活リハビリ」の意識を定着させているのだ。



医療法人社団協友会介護老人保健施設リハビリケアかつしかは、リハビリ室以外に各フロアに平行棒などを設置。専門職が作成したメニューをもとに、利用者がいつでもリハビリに取り組めるようにしている

また、かつしかでは専門職をリハビリ室だけでなく、フロアにも常勤させる体制をとっている。この身体能力を測定。そのうえで、①利用者が自分でできることは何か、②介助が必要ならば、どう介助すれば良いのか——を指導している。そうすることで、利用者が自分でなるべく身体を動かす「生活リハビリ」の意識を定着させているのだ。

さらに同施設では、利用者の自主性を促す工夫がされている。「自分でもっとリハビリがしたい」という利用者のため、フロア内に(リハビリ室ではなく)リハビリスペースを設置。重りや平行棒をつかった安全にできる自主トレーニングメニューを専門職が作成し、独自に取り組める体制も整えている。

「活動と参加」をめざす
今年度の介護報酬改定で初めて活動と参加を支援するリハビリの指針が求められたが、3施設にとっては、以前から向き合ってきた課題だったようだ。

くがやまでは、数年前から「活動と参加のリハビリ」に関する勉強会を実施してきた。そこでは「リハ職と介護職の意思疎通を緊密にし、垣根を越えた連携が必要」(新井聡美サービスクリ主任)との課題も上がってきている。また、協力関係にある近隣の訪問介護・看護事業所である「セコム在宅総合ケアセンター久我山」との情報共有も始まり、近いうちに地域としての取り組みにつなげていく計



新井聡美サービスクリリハビリ担当副主任(社会福祉法人康和会介護老人保健施設ろうけんくがやま)

につながるリハビリのあり方を検討してきた。同施設では、「リハビリを利用者の本当の社会復帰につながるものになりたい」という須田副施設長の思いから、車の運転が必須である地域性を考慮し、運転に役立つリハビリメニューなどを取り入れるようにしているという。さらに須田副施設長は、活動と参加につながるよう、高齢の利用者の就労支援など社会復帰策にも老健がかかわるべきだと考えて

いる。「どのような形で実現が可能かは模索中ですが、リハビリは家庭や社会のなかで生きてこそ意味があるのです。社会復帰を見越したりリハビリを計画書に組み入れ、それをめざしていくことが理想だと思います」と力を込めて話した。

老健にとつての活動と参加のリハビリのあり方は、いま第一歩を踏み出したところのようだ。



リハビリの効果を上げるためには声かけが大切。社会福祉法人康和会介護老人保健施設ろうけんくがやまでは、「回復後、何をしたいのか」などの希望を聞き、夢の実現のためのサポートをしている。退所後の在宅生活支援のために訪問リハビリにも注力する

施設データ



社会福祉法人康和会介護老人保健施設ろうけんくがやま
[住所]東京都世田谷区北烏山2丁目14-20
[TEL]03-3309-8546
[URL]http://www.kouwa-kai.org/facilities/insurance.html



医療法人森田記念会介護老人保健施設プロスペクトガーデンひたちなか
[住所]茨城県ひたちなか市高野字柏野2455番地1
[TEL]029-354-3210
[URL]http://www.morita-kinenkai.com/index.php



医療法人社団協友会介護老人保健施設リハビリケアかつしか
[住所]東京都葛飾区西新小岩3-37-8
[TEL]03-5672-1178
[URL]http://www.rc-katsushika.jp/